



11月8日の金曜日、33期の西村さんと、その中学生時代の友人2名、そして私と、物理学科の友人の計5名で、楽しくお酒を飲む機会があった。

私と西村さんは、ワングルの先輩・後輩の間柄であるが、他の人々同士は全くの初対面である。今日はなかなか珍しい面会で酒が飲めるなと思い、片町へ行く。酒はおいしく、会話が弾む。愉快、愉快。学部の人々も大満足で、「次回があるのなら是非誘ってくれ」とのこと、やはり「ワングル子」の名を欲しきままにした西村さんの人徳ゆえになせるワザなのでしょう。「あっ、そうそう。うち、舟田さんにパラグアイでの2年間について、書いてくれって頼まれてるんやった。」

と、ぼそりと言われる。思い出した。私も確か原稿を頼まれている。まっいいや。今日は飲もう。

(編者注…もう、許せん！締切を過ぎとるっちゃうのに、一緒になって飲んどるなんて。何が忙しいんやて、エエ！？)

「ご一報下されば、コンピューターにて、すぐ書き直します」と添えてあったけれど、この苦情を書き込むために、腹立ち紛れに自分で打ち直してしまったワネ。)

そういえば、ワングルの1柙代の先輩だったかと思うが、こんなことを言っておられた。

「社会に出ても、学生時代の友達付き合いが続くというのは大切なことだ。友達付き合いなんでものは、一朝一夕には出来ないものだから、大切にしなければいけないのではなからうか。」全くその通りで、この飲み会も西村さんと出会ったから実現したわけで、感謝しなくてはいけないなと思った。

8月23日の金曜日の早朝、立山ケーブル駅に集合。今年で4回目となる、蒲原 良太郎君追

悼山行の始まりである。

私は大学院の2回生でいまだに学生であるが、この山行のメンツの大半はすでにそれぞれの仕事を持っている。後輩の中にも、学生でなくなった人々が多数いる。「2泊3日で剣岳本峰まで」が予定であるが、仕事その他の都合で1泊2日の人も約半数おり、その人々は明日剣沢で現地集合することになっている。蒲原の御両親は車ですでに到着されており、準備万全の様子。

昨年から、計画書は大学に提出せず、団装は全て私物、または我々が購入した物で間に合わせることにし、これからも未永く続けていこうと、こんなスタイルに決めた。ケーブル駅の広場で、テント、鍋、食糧等を一杯に広げ、団装の荷分けのじゃんけん。掛け声にも気合が入り、勝利者から順々に取っていく。初日の夕食となるはずであった鳥肉約2キロを、私の家の冷蔵庫に置き去りにしてきた以外は、順調な滑り出しである。こういったアクシデントがあると、場の雰囲気は一気に和むが(言い訳)、会計の榎村さんは少々(かなり)困った様子で、近くのなんでも屋で豚肉を調達していた。

久しぶりに会う人々との会話が弾み、ケーブル、バスを乗り継いで室堂着。さてさて、ここからは歩きであるが、剣沢までのトンネルが欲しいと思ったのは、私だけだろうか？今年あたりから誰かバテてもおかしくない状況になってきている。ここから一度下って雷鳥沢へ、そこから登り返してさらに下るあのルートと、それぞれが考え想像するのか、不安そうな顔が並ぶ。蒲原さんは作ったような笑顔を見せ、去年よりもパワーアップした感がある。何でも、自宅付近の山を登っておられるとかで、今年は行けそうである。そしてバテたのは今年も37期の柴田君であった。

夕方、剣沢にて線香を焚き、剣岳に手を合わせる。37期には後輩としての付き合い、35期以上には先輩としての付き合い、我々には同期と

しての付き合い……で、考えることもそれぞれに違っているはずである。

写真と花を供え、剣岳をしばらくぼーっと見ている間、もし蒲原がいたらどうなっていたのかなと考えた。……まず彼は、受講カードの出し忘れて留年するであろう。が、教授の恩赦で何とか進学。夏、山以外の日は毎日海水浴へ。真っ黒になる。冬、苦手なスキーに無理矢理連れていかれ、骨折、入院。我々が見舞いに行くも、「どーしてお前らが来るんだヨ。可愛いねえちゃん一人も来ねーじねーかヨ」と言うに決まっているから、そこで我々のブラックユーモア出勤。ワングル子に鉢植えのボタンの花を持っていさせるが、その意味が分かっていない彼は、非常に喜ぶといったもので、次々と想像が膨らんでいく。

こんな想像をするのも、ここにこうしているからなんだろうなとは思いますが、4回目という慣れなのか、4年目という歳月なのか、初回の追悼山行の時のような緊張がない。ともあれ蒲原の御両親と、剣岳本峰へ行きたい。今年こそは、今年こそはと思うが、なかなか実現しない。去年は、わずかに一服剣までであり、少々意地になってきた感もある。明日は晴れるだろうか？酒もそこそこに、明日に備えて就寝する。

24日土曜日。起床するが無情のガスがたちこめている。無理をすれば行けるのであろうが、それではこの山行の主旨から外れるので、とりあえず二度寝を決め込む。どうしてこれほどまでにツキがないのか。

しばらくするとガスが晴れてきた。しかしもう本峰へ行って帰ってくるだけの時間はない。前剣までならば行けるということで、支度を始める。サブザックに、昼飯、水、その他一式を詰めて出発。前剣まで何のことなく到着したかにみえたが、実は、蒲原のお母さんが小さな落石に当たっていた。小さな落石とはいえ、これは今後の重要課題として残る。前剣以上となると、たてばい、横ばい、門など、御両親には少々怖い思いをしていただかなくてはならない。その対策を万全にすることで、剣に登りたい夢

を叶えてあげられるよう、確実なステップを刻んでいきたい。

テン場に戻れば後は1泊2日組を待つだけとなり、ビールを飲んで彼等を待つ。ビールがどんどんまわってきて、いい気持ちになり、剣岳がやけに近くに見えるようになった頃、その面々が到着した。剣沢が一気に賑やかになる。半年、1年、2年ぶりの再会である。職場の話、給料の話、結婚の話、それぞれの代で固まって話している。みんなとても嬉しそうだ。

夕食の後、宴会はさらにパワーアップした。明日は帰るだけという気楽さと、剣岳本峰に登っていない余剰体力で、話は尽きない。34期の松浦さんと奥さんも絶好調で、久しぶりにマシンガントークを聞く。酒が入ればさらにエンジン全開、今夜は皆さんほんとうに楽しそうだ。私自身も久しぶりに腹の底から笑い転げる事ができ、来年も、再来年も、こうして再会できたらいいなと思いつつ、シュラフに入った。

下山後、来年は34期の奥先輩がチーフを務めることとなり、テントと鍋などを手渡す。そして、誰もが心の底で引っ掛かっていたことを、ついに誰かが口にする。

「このスタイルで、本当にいいのだろうか？」ほとんどの人が、少なからず同じことを気にかけていただろう。しかし、解決法を見出すのも難しそうだし、ほったらかしておけといった感じであった。10月下旬に36期で蒲原の墓参りに行く予定なので、そこで酒を飲んで思っていることを言い合おうということにはなっている。

ともあれ、来年こそは本峰へ登りたいものである。



手配などをしているうちに、二回ほど「腹が痛い。ウンチがしたい。身体が動かない」などといったのに急に静かになった。おそらく身体がマヒしてきたのだろう。呼吸も脈拍も、見ているまに弱くなっていくのがわかる。意識がもうろうとしてきたようだ。事態は急を要する。再度、現状を伝え、無線でヘリの出動を要請した。しかし、答えは「ノー」であった。

自然と神に祈る気持ちになる。付近を通る登山者も足を止め、固唾を飲んで成り行きを見守っていた。スノーボートを待っている余裕などない。なんとしても、一刻も早く運ばねばならない。と思っていた矢先、呼吸が停止した。

パーティーのリーダーがマウスツーマウスの人工呼吸を始め、私は心臓マッサージを並行して行った。最初は、すぐに息を吹き返した。しかし、すぐに停止してしまふ。何度も繰り返すうちに、だんだん弱くなっていく……。

どのくらい時間が経過したろうか。まったく反応を示さなくなった。みんな、茫然として立ちつくす。仲間の「死」を認めたくないのか、リーダーは狂ったように心臓マッサージを始めた。それを見た私は、再び蘇生法を始めた。かれこれ二十分以上も経過したろうか、おそろおそろの瞳孔を確認してみた。完全に散大しており、これ以上手の施しようがないと判断せざるをえなかった。思わず合掌する。リーダーは、遭難者にしがみつき泣き出した。残っていた他の部員も、すすり泣いている。認めたくなくても、これが遭難の厳しい現実だ。

これからは救助ではなく、遺体搬送となる。無線で、スノーボートがいらなくなったことを伝え、遺体搬送の準備をした。駆けつけてくれた野営管理所のアルバイトや剣山荘の息子さんの力を借りて交替で担ぎ、別山尾根を下りた。途中、文部省登山研修所の先生方や受講生も加勢してくれた。身長一七五センチの大柄な遭難者の搬送は難儀したが、みんなの協力で安全にスピディーに運ぶことができた。一服剣まで来たとき、もうすぐヘリが来るとの連絡が入った。最後のところは、金山と乗彦が担いで走り、剣山荘ヘリポートまで運び、どうにか間に合った。

そして、やっと彼は、あれほど待ち望んでいたヘリコプターに乗って、ふもとの町へ下りていった。あとで医者から聞くと、遭難者は骨盤骨折で内出血しており、おそらく病院までヘリコプターで運んでも間に合わなかっただろうとのことであった。

飛び去っていく遭難者を見送りながら、平成三年の夏、北壁で我々の目前で息を引き取った小学校の女先生のことを思い出した。

山は本当に怖いと思った。これで、自分たちが救助できなかった人は、何人になったろうかと考えると、複雑な思いに駆られるのであった。

私に背負われ、抱きついて「あったかい」と呟いた大学生の言葉が、妙に耳に残って消えなかった。

「山岳警備隊 出動せよ！」

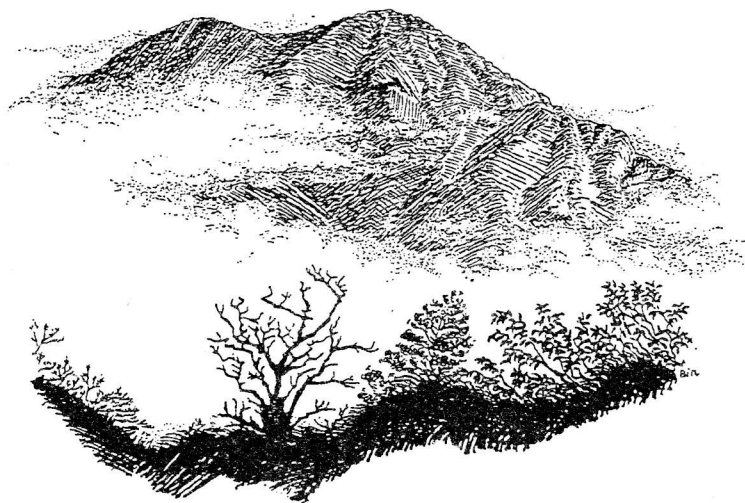
(富山県警察山岳警備隊編

東京新聞出版局)

から、転載しました。

2 ページ前から読み下さい。

ゴーストライターのいるノンフィクションということで、多少事実とは違う記述もあるようですが、36期蒲原 良太郎さんの事故のことです。



登山者の多い別山尾根道を、汗を拭き拭き登る。私が現場へ着いたときは、私より一〇センチほど足の長い乗彦がすでに現着し、「弱ったぞ」と、しかも面て遭難者に応急手当を施していた。遭難者は、岩壁の下で腕と頭から出血して血だらけになり、右足は腫れ、大腿部から直角に折れ曲がっていた。

「痛い。痛い。足が動かない」と呻いていた。いつまでも同じ場所に置いておくわけにもいかず、ヘリを要請するにしても、乗せることのできる場所まで下ろさなければならぬ。ザイルを素早くセツトし担ぐと、さっきまで「寒い、寒い」といていた遭難者が私の背中に抱きついて、

「あったかい」

と大きく、安堵の息をついた。ほんのしばらくして、

「これで帰れるんですね。お願いします。ヘリコプターを頼んで、病院へ運んでください」

「腰から下の感覚がありません。力が入らん。どうなったんでしょうか？」

「無茶苦茶に腹が痛い。なんとかしてください」

しがみつき、哀願する。

「わかった。すぐに場所のいいところまで下ろしてやるから、頑張れ！」

必死になっていた。もう少しで、ザイルなしでも歩けるところまで来たとき、

「腹が痛い。下ろしてくれ！」

痛みに耐えかねたのか、腕で力いっぱい私のあご下を絞めた。息もできず、これは大変なことになったと思ひ、

「あと一〇メートルだ。頑張れ！」

励ましながら、急いで平らなところへ運び、岩の上に下ろした。すると今度は、

「ウンチがしたい。ベルトを外してズボンを下ろしてくれ」

といった。もう猶子がない。乗彦が無線で懸命にヘリを要請していた。

「天候曇り。視界はときどきガスがかかるが、剣沢は晴れてよく見える。西の風約三メートル。平蔵の避難小屋からビックアップ願います。どうぞ」

「天候が不安定で、現状では平蔵でのビックアップは高度的にも不可能。平蔵の都合か剣山荘まで搬送してください。どうぞ」

現場で遭難者を見ているものには、本当につれない言葉が返ってきた。

運べといったって、運ぶことじたい危険なのは目に見えている。かといって、手をこまねいて待っているわけにもいかない。担ぐと痛がることから内臓出血、あるいは肋骨骨折も考えられる。ぐずぐずしていることも許されず、少しでも早く病院へ収容するため、搬送する決断をして派出所からスノーボー



が育ってもいいのに、年々世話役が楽になって
もいいのに、ますます車の手配にも難渋し、絶
句するような質問を受けるようになってきて
いる。

(その日私は千葉へ出掛けていて、参加してい
たのは主人である。主人からの又聞きの範囲
の話。)

くろゆりへ入会(総会時、若干名の補充があ
る)して2回目の山行であるA氏は、車中でも
連れとビールを飲んで騒いでいた。くろゆりの
全員を知っているわけでもない主人は、随分な
めた人がいるもんだと呆れたそうだが、徳本峠
へ着く手前で、故障者が出たとの騒ぎに近づい
てみると、案の定A氏であった。

ある事故から

15期 舟田 節子

8月25日、前夜車中泊で、くろゆりクラブは
上高地から徳本峠へ向かった。

くろゆりクラブは、12年前朝日新聞に北陸の
百山が連載されたことをきっかけに、読むだけ
ではつまらない、実際に登ってみたい…の読者
の要望を受けて発足した。その企画で部数を伸
ばした支局長はとくに転勤し、律儀に面倒を
見続けているのが、我がナカオ山岳会である。

「今の…」は決して若者だけではなく、中高
年にも蔓延している。中から次々とリーダー格

ある大学生の死

谷内六治（上市署／分隊長）



ミヤマガラス

これは平成四年八月二十六日、釧岳の一般ルート、カニの横這い付近で、ある大学山岳部の下山中に起きた事故。私の背中で、「あったかい」と呟いていたのに介抱の甲斐なく、目の前で息を引き取った大学生の話である。

当時、釧沢警備派出所には、久保ちゃん（久保英一隊員）しかおらず、私は佐伯乗彦と文部省登山研修所の大学山岳部の夏山リーダー研修会講師として、別山北壁で岩登り技術を教えていた。

岩場で研修生相手に講釈をたれていたら、

「事故発生、応援頼みます」

とのマイクが入った。派出所で、釧山荘からの連絡を受けた久保ちゃんが管理所のマイクで呼びかけているのだ。山本一夫主任講師からは、

「谷内先生と佐伯先生、現場へ行ってあげてください。応援がいるようでしたら、いつでも呼んでください」

と、ありがたい言葉をいただいた。

そして現場へは、たまたま遊びにきていた元山岳警備隊員の佐伯茶祥も行ってくれることになった。山の人たちの仲間意識と損得抜き協力には、本当に頭の下がる思いがする。

事故のパーティーは女子一人を含む七人で、今朝、早月小屋を出発、早月尾根を登り釧岳頂上を経て下山中、カニの横這い付近で遭難者が浮き石に乗り、約一〇メートル転落し、瀕死の重傷を負ったものだった。

「休めば、そのうち治るわいね」「交代で担いで降ろすか」と騒がしいなかで、緊急搬送を必要とする発作と見抜いたのは、やはり現職の強みである。

徳本峠の主の対応は結構のらりくらりだったそう。中高年登山者の我儘に、いちいち付き合っていられないのか彼等の本音であろう。それでもおたおたの騒ぎには同情して、「私も一緒に担いであげましょう」とまでは申し出てくれていた。

それでは間に合わない。「金沢大学の…」と名乗ったところで、ようやく彼は真顔になり、その後はまさに場馴れした対応で、ヘリ要請に動いてくれた。要請してから10数分の空白時間があつたそう。後で、この間にA氏宅へ「ヘリ搬送には75万かかるか払う意志があるか？」

との確認が行われていたと聞いた。民間ヘリはこの確認がとれない限りは飛ばないそう。ともかく確認ができてから現場へは「ヘリの手配がついた」との連絡が入ってきたのだった。

A氏は幸いに一命をとりとめ、詰まったのが細い血管だったおかげで順調に回復し、職場復帰の見込みもたった。後日お礼に来た時、

「どうしてもヘリでの搬送が必要だったとの医師の証明があれば、高額医療として還付してもらえるんですが…」と洩らした。

書類があれば書きますよと返事はしたのだが……。

この事件の教訓……ちょうど山溪1月号にも特集が組まれている。くろゆりも今、改善を図ろうと苦慮しているところである。